

市内遺跡発掘調査等事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

松倉城墨群発掘調査報告Ⅲ

—富山県魚津市鹿熊地内試掘調査報告—

2004

魚津市教育委員会

序

遺跡の発掘調査によって見つかる遺構やその出土品は、地域の歴史を知る上で、とても貴重なものといえます。国民共有の財産である遺跡（埋蔵文化財）は、それぞれの地域固有の財産もあります。そして地域史を考える上でも、語り部としてその役割を果たしてくれる訳です。

ここ魚津市は、旧石器時代から現代にいたるまでの連綿とした人々の生活の足跡が、その大地に刻みつけられています。その中でも、富山県の中世史において重要な位置付けを占める遺跡として、松倉城跡が挙げられます。かつて越中国における政治の中核として、攻防戦が繰り返されてきました。また、越後上杉氏と北陸平定を目指す織田方連合軍が、松倉・魚津両城を舞台に、壮絶かつ悲劇的な戦いが行われたことは、資料に散見されるところです。

松倉城跡の周辺には、多数の山城（支城）や砦跡が確認され、その松倉城を取り囲むように広域な城壁群を形成しています。谷間を流れる角川流域には、かつて城下町が存在していたと考えられていますが、実態はほとんどわからていません。

魚津市教育委員会では、平成13年度から5ヶ年にわたって松倉城壁群の範囲・実態把握を目的に、国・県の補助を受け、試掘・測量・分布調査を実施していくこととし、今年度は3年目にあたります。今回は、推定城下町区域への入口付近に所在する地点の試掘調査と、升方地内に位置する升方城跡の地形測量調査を行いました。従来まで、その重要性や稀少価値が認められながらも、正確な地形測量図がありませんでした。今回は、升方城跡の主要な遺構群を、ほぼ網羅した測量図を作成することができました。一方試掘調査では、中世期の遺物や遺構が確認され、未発見の遺跡として確認できました。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、多大な御協力を頂きました鹿熊、升方両地区の方々や関係機関、冬場の調査にあたった作業員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年 3月

魚津市教育委員会

教育長 宮野 高司

例　　言

1. 本書は松倉城址群範囲確認調査事業のうち、平成15年度に実施した推定城下町区域である、鹿熊地内における試掘調査の概要報告である。
2. 調査は、国庫補助金・富山県補助金を受けて、魚津市教育委員会が調査主体となり実施した。事務局は魚津市教育委員会生涯学習課に置き、文化係が担当した。調査担当は、市教育委員会生涯学習課学芸員の塩田明弘が行った。発掘作業は社団法人魚津市シルバーハンモックセンターに委託した。
3. 調査期間・対象地・面積は下記のとおりである。

升方城跡地形測量期間 平成15年10月15日～平成16年1月30日
試掘調査期間 平成15年11月12日～平成15年12月11日
遺物整理期間 平成15年12月12日～平成16年3月31日
地形測量対象地 富山県魚津市升方地内
試掘調査対象地 富山県魚津市鹿熊地内
調査面積 地形測量対象範囲：50,000m²、試掘調査：50m²

4. 発掘調査現場では、児原雄大（富山大学考古学研究室学生）、先名守（当時教育委員会生涯学習課）の協力を得ている。また出土遺物の整理のうち洗浄・注記は中尾光子、実測・拓本作業は細田隆博（同大学研究室学生）の協力を得ている。
5. 報告書作成にあたって、本書の執筆は塩田が担当した。遺構・遺物の実測、拓本、トレース、遺物の集計作業などは塩田、細田が行った。遺物の写真撮影は、栗山雅夫氏（福岡町教育委員会）に協力・助言を頂いた。
6. 本調査で設定した、基準杭は国土座標（世界測地系）を用い、水平基準は標高である。なお、図版中の方位は磁北を使用している。
7. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。
8. 試掘・測量調査において、下記の地権者の方々や鹿熊、升方両地区の区長、地元住民の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）
中田登與志、溝口哲栄、溝口与古、溝口太左衛門、溝口作次郎、溝口力次郎、溝口太次郎、溝口直次郎、溝口吉四郎、溝口太一郎、溝口良平、溝口林松、溝口雅之他
9. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。（敬称略）
菅沼幸春（地元城郭研究家）、高岡徹（富山県埋蔵文化財センター）、宮田進一（富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所）

目 次

序

例 言

I. 調査に至る経緯	4
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の概要	
1. 調査の方法	6
2. 調査の成果	
(1) 地形測量調査	6
(2) 試掘調査	6
IV. 調査のまとめ	17
出土遺物観察表	18
写真図版	19
報告書抄録	



I. 調査に至る経緯

魚津市教育委員会では、これまで平成4年度から7年度にかけて、松倉城跡範囲確認調査を実施してきた。これは、松倉城跡の詳細な地形測量図の作成と考古学的調査による遺構の範囲や年代を特定することを目的としたものである。その調査成果は、広大な松倉城の様相についての一端を示すものであり、更なる継続的な調査が期待されていた。

これを受け市教委では従来の調査・研究をもとに、松倉城単独ではなく、周辺に点在する山城や砦（支城）・城下町（居館・寺院・町屋）を含めた遺構の範囲確認や遺存状況の把握を目的に、平成13年度から平成17年度までの5ヶ年による、松倉城星群範囲確認調査事業を行ってきた。

平成13年度には、推定城下町区域である鹿熊地内のボンヤシキ地区・ヒョウタン地区（淋光寺遺跡）、オヤシキ地区（鹿熊オヤシキ遺跡）、三枚田地区の各地区にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。各調査区において、室町～戦国時代の遺構・遺物を確認できた。特にオヤシキ、一枚田地区では礎石建物と推定される石列や、溝、土坑などを検出し、従来の遺跡範囲よりさらに拡がる点や新たな遺跡（仮称・鹿熊二枚田遺跡）の発見などの知見を得た。出土遺物は、中世土師器皿を主体として他に国産・貿易陶磁器類などで、15世紀後半～16世紀代のものである。

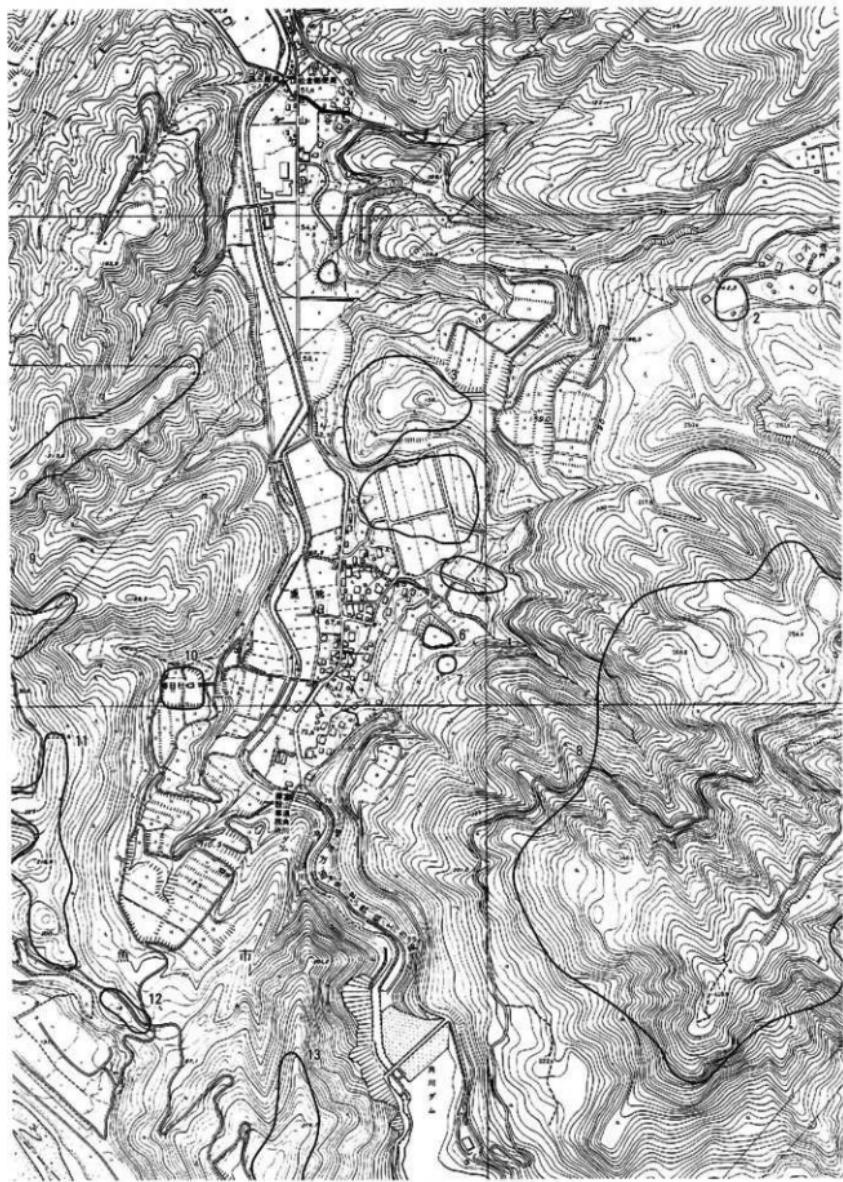
平成14年度は、同じく鹿熊地内に所在する、鹿熊ホーエン遺跡とその周辺の地形測量及び試掘調査を実施した。遺跡中心部である上墨内側の平坦面より15世紀後半～16世紀代に位置付けられる多数の土師器皿が出土した。また遺跡内に築かれた上墨にある出入り口のひとつより、階段状に整形された遺構や上墨外側部分に空堀状の遺構が存在していたことが確認できた。遺跡の性格として、防衛性が薄い点や出土遺物の組成から、日常的な生活活動を行っていたのではなく、祭祀的な空間としての様相が濃いことから、寺院跡の可能性が推定された。

当年度は、松倉城星群のうち重要な支城であったと考えられる升方城跡の地形測量図の作成と城下町が形成されていたとされる鹿熊地内の通称「矢竹」と呼称される部分の試掘調査を実施した。この地は、過去の田直しの際に中世期の遺物が出土していたことから、地権者より遺跡の可能性があることを指摘されていた地点である。今回の調査対象地区である丘陵台地の下にある水田からも、珠洲焼の壺片（第3図）が出土しており、遺跡の有無の確認を行う目的で、試掘調査を実施した。

II. 遺跡の立地と環境

魚津市は、富山県の東部中央から北東端部に位置する。市内には、滑川市との境をなす早月川、黒部市との境である布施川のほかに、毛勝山から流れる急流河川である片貝川や、角川が貫流する。魚津市の地形は、立山連峰剣岳から毛勝山、僧ヶ岳へと連なる山岳地帯とその前山を成す丘陵地帯、台地と平野部を構成する扇状地帯で構成される。市の平野部は僅かで、発達した洪積台地は河川によって形成された河岸段丘が顕著に見られる。

松倉城跡やその支城と考えられる水尾城跡や升方城跡など多数の山城や砦は、丘陵地上に立地し、この丘陵地は主に凝灰岩や泥岩などで構成される。松倉城跡の所在する城山の麓、谷間を流れる角川の流域及び丘陵裾部には、かつて城下町があったとされる鹿熊集落が広がる。現在この地区は、宅地と圃場整備の行われた整然とした水田、一部は畑・杉林で占められる。鹿熊地区を貫流する角川は、早月川と片貝川の分水嶺付近に水源をもつ河川で、中流域には宮津など港の所在を想起させる地名が



第1図 松倉城跡周辺図 ($S=1/10,000$)

1. 矢竹遺跡 2. 小曾沼武家屋敷跡 3. 焼山砦 4. 鹿熊オヤシキ遺跡 5. 淋光寺遺跡
6. 三枚田遺跡 7. 鹿熊ホーエン遺跡 8. 松倉城跡 9. 升方城跡
10. 鹿熊城殿遺跡 11. 南升方城跡 12. 石の門砦 13. 水尾城跡

残る。松倉城跡やその周辺の調査では、中国製の磁器や多数の国産陶磁器が見つかっており、その運搬に角川の水運が使用されていたのであろう。日本海へ流れ出る角川の河口尻は昭和初期まで魚津港として、数多くの船が出入りした港町であった。

平成15年度の試掘調査の対象地は、鹿熊集落より北側へ600m程にあり、松倉城跡がある城山（標高約430m）から北北西へ派生した丘陵末端部に位置する。調査区のある丘陵末端部と谷を挟んだ南側に焼山砦（通称テラヤシキ）が位置する。矢竹と呼ばれる当地は、不整一角形を呈する岩状に突き出た台地上にある。標高約70m、面積約870m²を測り、ここから眼下には、角川や鹿熊集落へと通じる街道を見下ろすことができる。明治初期の地籍図には田と表記されていることから（写真図版2参照）、江戸時代には水田として使用されていたと考えられる。現在は休耕田となっている。

なお、遺跡周辺の歴史的環境や調査地内の鹿熊地区について、また松倉城の概要や参考文献については、これまでの城壁群調査の報告書に記載されているので、本報告では割愛した。

III. 調査の概要

1. 調査の方法

試掘調査地の選定にあたっては、（1）圃場整備による掘削の影響が少ないと想われる地点、（2）現地やその近隣で中世期の遺物が採集された地点、（3）字名や通称名によって何らかの遺跡が想定される地点、（4）城郭研究者や地元鹿熊地区の方々の意見を基に、地権者の同意が得られた地点、を勘案して調査対象の候補地としている。

試掘調査を始める前に、基準杭の設置を行った。このために平成14年度に実施した鹿熊地内の地形測量で使用した基準点を跳ばして、調査区範囲内に3箇所設定した。このことから、試掘箇所や出土遺物の地点は、国家座標により把握できるようにしている。発掘調査作業は、人力による掘削で、表土を除去し、層位を確認しながら造構検出面まで下げた。また盛土部分は一定の深度を掘削して掘り下げを中止した箇所もある。掘削作業の終了したトレーンチから土層堆積層位図・造構平面図を作成し、記録につとめた。出土遺物は、トータルステーションを用いて出土地点・海拔高を記録し層位ごとに取り上げた。調査終了後に埋め戻しを行い、12月11日に現地調査を終了した。

2. 調査の成果

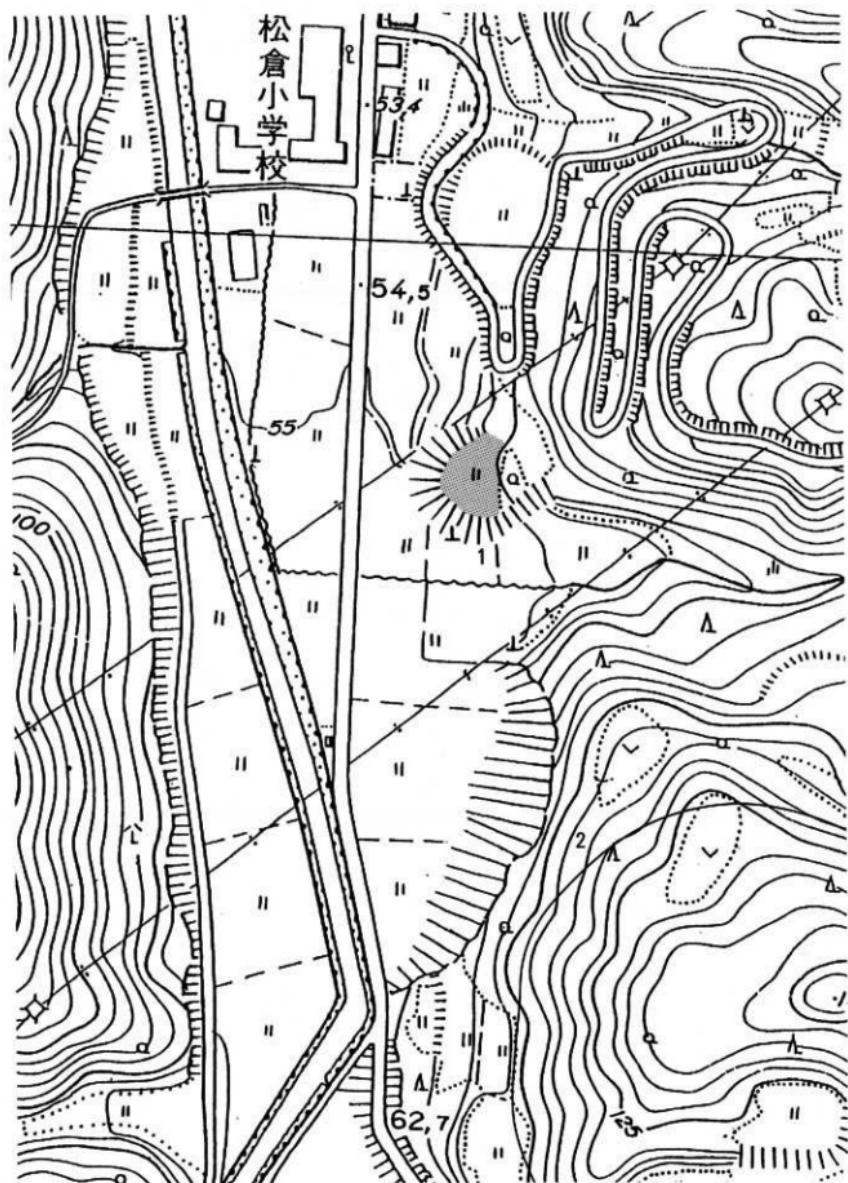
（1）地形測量調査

地形測量は業者委託により、縮尺500分の1（主曲線50cm）と1000分の1（主曲線50cm）による測量図を作成した。等高線と別に、現況地形の上場と下場、通路を書き加えている。

升方城跡の地形測量に際して、まず始めに除草作業を行い石積みや造構の形状を把握し易くした。また現地測量にあたって、測量業者と共に地形や造構の確認を行いながら可能な限り造構図に反映させている。なお測量図は、次年度の平成16年度において升方地区の試掘調査を実施する予定であり、その調査結果と併せて報告書に掲載する。

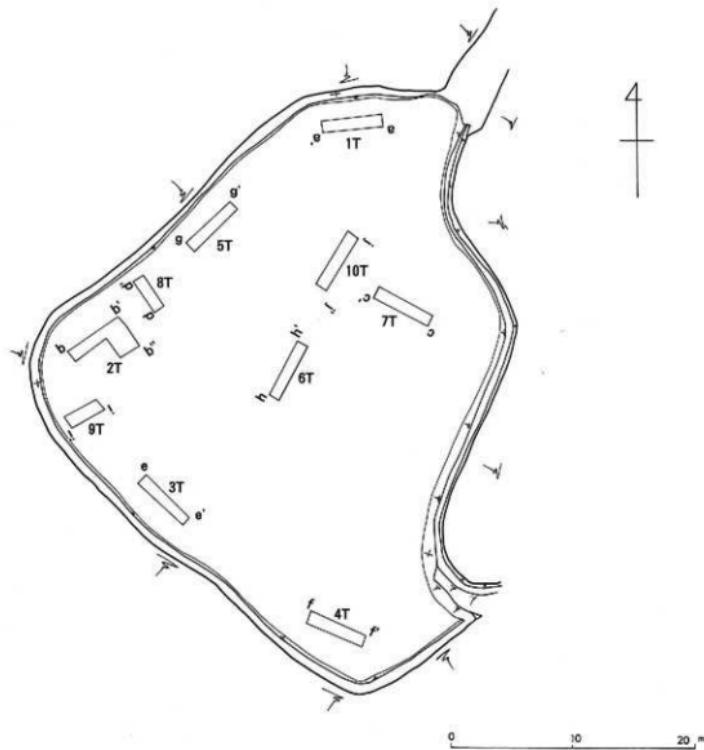
（2）試掘調査

試掘トレーンチは調査対象地の外縁を中心に、上墨の痕跡や柵列などの柱穴を確認するために、7箇所設定した。さらに中央部分での造構確認を行うために3箇所を設定した。なお、対象地の東側半分は過去に田直しを行っていて、約50~60cm程削平している。このため、あえてトレーンチ設定区から外している（IH状は写真図版2の地籍図を参照）。設定したトレーンチは、5m×1mであるが、一部

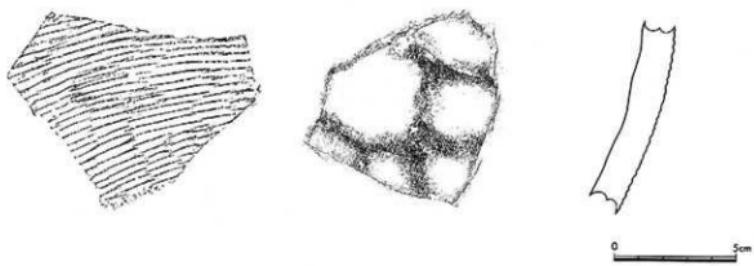


第2図 試掘調査対象地区とその周辺 ($S=1/2,500$)
 (スクリーントーンによる網かけ部分)

1. 矢竹遺跡 2. 燃山岩



杉田氏表探遺物



第3図 試掘調査対象地区平面図 ($S = 1/400$) と近隣の表探遺物 ($S = 1/2$)

3 m × 1 m としたり、拡張した箇所もある。

基本層は 1 層が茶褐色粘質土で耕作土である。2 層が青灰色粘質土で床土部分となる。3 層は褐灰色粘質土で、土層中に鉄分の沈殿層が帯状に堆積している部分が数カ所認められることから、近世の水田部分と推定される。この層からは近世陶磁器や中世土師器皿が出土する。4 層は灰褐色粘質土で炭化物片を多量に含む中世期の遺物包含層である。以下の層位は地点により若干異なるが、茶褐色もしくは暗褐色系粘質土で、炭化物片や地山ブロックを含む中世遺物の包含層である。なお地山は鹿熊地区において広く確認される泥岩質の黄白色粘質土層である。

1 T (第4図)

層位 4 層以下が中世の遺物包含層である。5 層から特に多量の炭化物片が確認された。また 6 層では 15cm 程の円碟や 20cm 程の地山の塊が認められ、整地した可能性もある。

遺物 4 ~ 5 層より川上した中世土師器皿は、ナデ調整により口縁端部を外折させたものや口縁端部をつまみあげた形態をとる。所属時期は 15 世紀後半 ~ 16 世紀前半が大半であるが、5 は、端部を鋭く尖らせた口縁形態を持つ 16 世紀後半に位置づけられるものである。

2 T (第4図)

層位 4 層以下が中世の遺物包含層である。いずれにも炭化物片や地山の塊もしくはブロック状の粒が混ざっている。4 層以下は水平堆積ではなく、人為的な造成によるものとも考えられる。

遺構 明確な遺構は確認できなかった。但し 6 層中位より、厚さ 3 ~ 4 cm 程の炭化物堆積層が広く確認された箇所が検出された。さらに同じレベルで僅 30cm 程の円形プランの堆積層も検出された。ピットのような掘り込みではなく、薄い堆積層となっている。いずれも土師器皿が出土しており、その所属時期から、16 世紀前半に形成されたものと考えられる。その堆積層の下層となる 6 層下位より、15 世紀後半の七輪器皿 (9) が、径 40cm の長方形を呈する平坦な石の脇より炭化物片と共に出土した。

遺物 2 層より越中瀬戸の皿 (14)、3 層より越中瀬戸の壺 (15)、中世土師器皿 (11) が出土した。4 層は、強いナデ調整により口縁端部を外反させるタイプ (7、8) である土師器皿が川上し、その所属時期は 15 世紀後半から 16 世紀初頭である。6 層では、ロクロ成形によるものであるが、底部外面にヘラ削り調整を施す 15 世紀後半 ~ 16 世紀初頭に位置づけられる土師器皿 (9) と共に 16 世紀初頭の土師器皿 (10) が確認された。

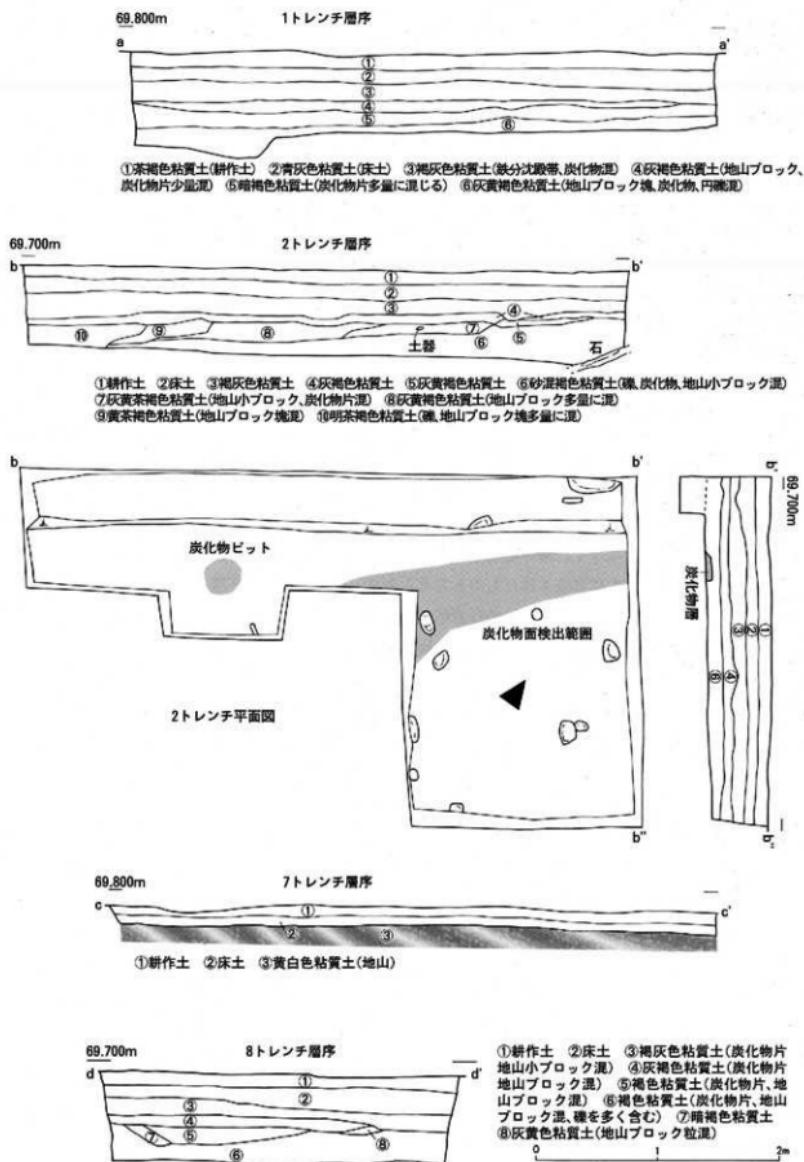
3 T (第5図)

層位 4 層以下が中世遺物包含層である。いずれも炭化物片、地山ブロックが混ざる。4 層より下層は人為的な掘り込みが見られ、6、9 層中からは径 30 ~ 40cm 程になる礫が多数検出された。このことは、元は崖であった斜面部分に、平坦面を築造する際に造成したことを示すものと推察される。

遺物 4 ~ 7 層中から、15 世紀後半から 16 世紀中頃に至るまでの土師器皿 (16 ~ 19) がある。3 層より出土した 20 号は越中瀬戸の皿と考えられるが、大窯期の瀬戸と近似している。高台内面まで鉄軸が施されており、越中瀬戸の創業期のものであろうか。上市町弓庄城跡の発掘調査によって出土した資料の中にも類例がある（註：宮田進・氏教示による）。

4 T (第5図)

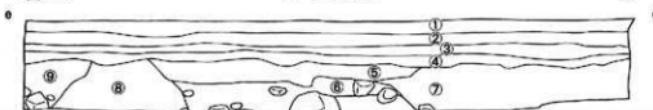
層位 5 層では、3 T 同様、平坦面造成によるものと考えられる礫が多數検出された。また 6 層は溝状遺構の覆土と考えられる。砂混じりで、焼土と炭化物を含むものである。4 T の東側は地山面が確認された。近隣の尾根が派生した部分を削って平坦面を造成していることがわかる。3、4 T において確認された平坦面の造成は、多數の礫と土で埋め立てたもので、この層からは炭化物片が確認され



第4図 1、2、7、8層位図・平面図 (S=1/40)

70.800m

3 トレンチ層序



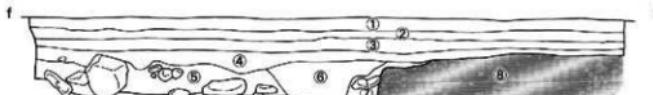
- ①耕作土
- ②床土
- ③褐灰色粘質土
- ④灰茶褐色粘質土(炭化物少量、地山ブロック粒混)
- ⑤黄茶褐色粘質土(地山ブロック粒混)
- ⑥暗黃褐色粘質土(地山ブロック粒多量に混)
- ⑦黄褐色粘質土

3 トレンチ平面図



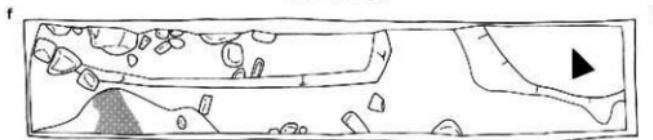
69.800m

4 トレンチ層序



- ①耕作土
- ②床土
- ③褐灰色粘質土
- ④灰茶褐色粘質土(地山ブロック、炭化物混)
- ⑤明茶褐色粘質土(礁混)
- ⑥砂泥暗褐色粘質土(礁土、炭化物混、溝状造構の覆土)
- ⑦暗黃褐色粘質土

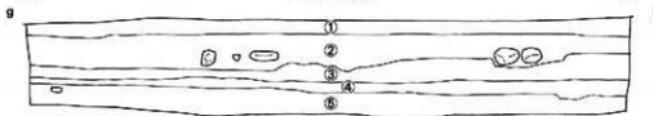
4 トレンチ平面図



炭化物面検出範囲

69.800m

5 トレンチ層序



- ①耕作土
- ②床土
- ③褐灰色粘質土
- ④暗褐色粘質土(地山小ブロック、炭化物多量に混)
- ⑤赤褐色粘質土(地山ブロック塊多量に混)



第5図 3～5トレンチ層位図・平面図 (S=1/40)

ない点は造成時期を考える上でも重要である。

遺構 炭化物が散布している範囲の中央部分において、特に集中して確認された。

遺物 溝状遺構の覆土より、16世紀前半の土師器皿（23）が出土した。また3層より16世紀中頃の上師器皿（24）と珠洲焼の壺片、4層より16世紀末頃の越中瀬戸の皿（25）、他に魔土で15世紀後半～16世紀代の青花碗（26）が出土した。

5 T（第5図）

層位 4、5層から土師器皿が多数出土した。4層は炭化物が多量に混ざった層である。5層の上部には地山の塊が多く混ざる。遺物の年代観からは、5層が形成されてさほど間を置かずに、4層が堆積したものと考えられる。

遺物 3層より16世紀後半（35）、4層からは15世紀後半から16世紀前半（27～30、33、34）、5層からは15世紀後半～16世紀中頃に位置付けられる上師器皿（31、32、36）が出土した。他に4層からは越前焼の壺・甕の破片が確認されている。

6 T（第6図）

層位 層位図に見られる②'層～⑨'層は2層から掘り込んでおり、現代のものである。4層より下層は安定した堆積が見られず、一部中世の遺構と推定される掘り込み（SK1）が確認できた。

遺構 上坑（SK1）を検出した。覆土には地山ブロックや炭化物、15cm大の小礫が混ざり、土師器皿と瓦器が出土した。

遺物 3層より15世紀後半から16世紀初頭（37、38）、4層からは15世紀後半から16世紀初頭（39、40）と16世紀前半（43）の土師器皿が出土した。10層では、15世紀末頃の天目釉の瀬戸美濃平碗が出土している。検出した土坑（SK1）の覆土からは、15世紀後半から16世紀初頭（41）、16世紀前半（42）の土師器皿と16世紀代と見られる瓦器の鉢が出土している。

7 T（第4図）

層位 耕作土と床土を除去すると、すぐに地山面が検出された。この地点はかつて高台の水田があつた箇所である。出土遺物は、地山直上より土師器皿と越前焼の壺片である。

遺物 土師器皿は16世紀前半（46）と中頃（47）に位置付けられるものである。

8 T（第4図）

層位 5層と6層は同色であるが、6層では15～20cm大の礫を多く含むものである。これらも平坦面築造のための造成と考えられる。調査区全体で確認できる4層（灰褐色粘質土）の下層である5層から16世紀末頃の越中瀬戸（50）が出土している。4層の形成がそれ以降を示すものであるが、混入の可能性も考えられる。

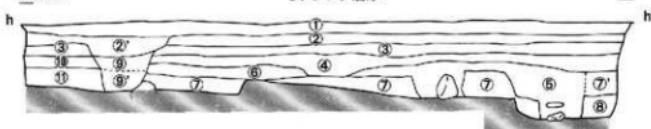
遺物 3層で越前焼の壺片、4～5層より16世紀前半にあたる上師器皿（48、49）と16世紀末から17世紀初頭にあたる越中瀬戸の擂鉢（50）が出土した。同じ層位から、写真図版に示した炭化材と炭化米と推測できる遺物も確認できた。これらは今後、科学的な分析を行い、年代や種類などの詳細を確定していく予定である。

9 T（第6図）

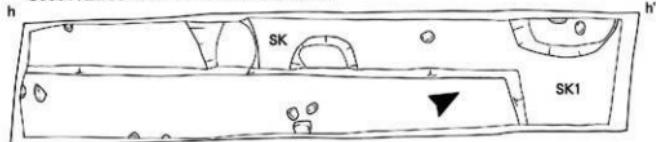
遺構 表土から、約40cm程の4層から、扁平な石や地山である泥岩質の塊が検出されたので、このレベルで掘削を中止した。さらにトレーナーの東側端部において溝状遺構（SD）を検出した。覆土は黒色上で、しまりがない。泥岩質の塊が2個確認された以外に遺物は出土していない。所属時期は判然としないが、4層中からの検出であるために中世期の遺構としたい。

69.800m

6トレンチ層序



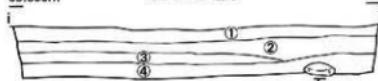
- ①耕作土 ②床土 ③青灰色粘質土(鉄分混) ④褐色粘質土 ⑤暗褐色粘質土(地山ブロック、炭化物混、遺構土) ⑥黃褐色+褐灰色粘質土(地山ブロック粒、小礫混)
 ⑦黃褐色粘質土(ローム層) ⑧暗黃褐色粘質土 ⑨黒褐色粘質土
 ⑩褐灰色粘質土(鉄分、地山ブロック、青灰色粘土混) ⑪灰褐色粘質土(地山ブロック、炭化物、小礫混)
 ⑫褐灰色粘質土(地山ブロック、炭化物、小礫混)
 ⑬黃茶褐色粘質土(地山ブロック、炭化物、小礫混)



6トレンチ平面図

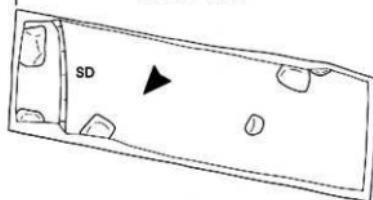
69.800m

9トレンチ層序



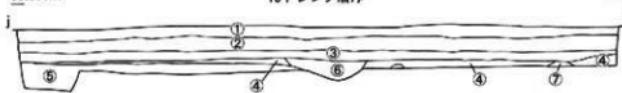
- ①耕作土 ②床土
 ③褐色粘質土(糸状、地山ブロック粒、炭化物混)
 ④灰褐色粘質土(地山ブロック、炭化物混)

9トレンチ平面図



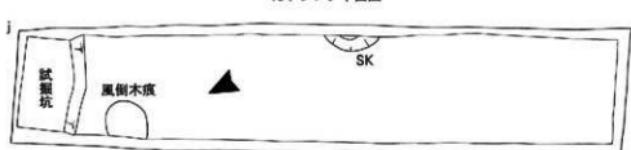
69.800m

10トレンチ層序



- ①耕作土 ②床土 ③褐色粘質土 ④灰褐色粘質土(鉄分、地山ブロック混)
 ⑤灰黃褐色粘質土(地山ブロック塊多量に混) ⑥暗灰褐色粘質土(地山小ブロック、炭化物混)
 ⑦明茶褐色粘質土

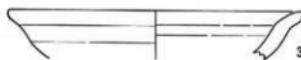
10トレンチ平面図



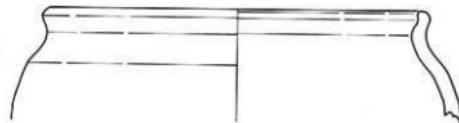
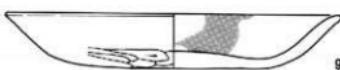
0 1 2

第6図 6、9、10トレンチ層位図・平面図 (S=1/40)

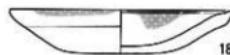
1トレンチ(1~5)



2トレンチ(6~15)



3トレンチ(16~22)



第7図 出土遺物実測図① (S = 1/2)

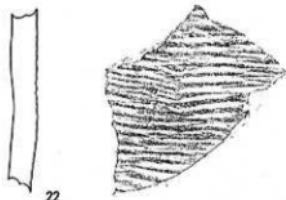
3 トレンチ(16~22)



20



21



22

4 トレンチ(23~26)



23



24



25



26

5 トレンチ(27~36)



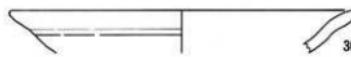
27



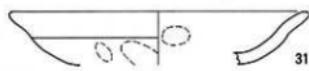
28



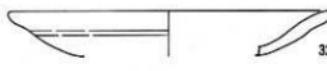
29



30



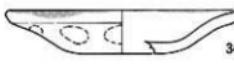
31



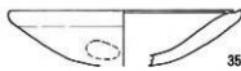
32



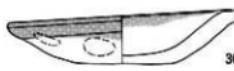
33



34



35

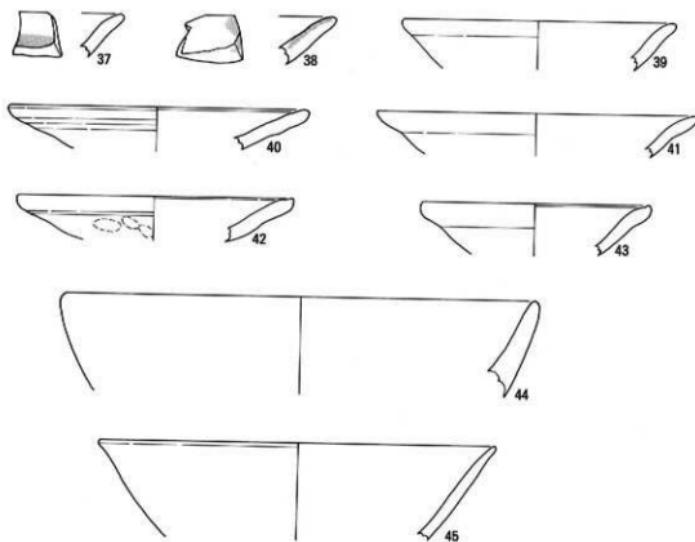


36



第8図 出土遺物実測図② (S=1/2)

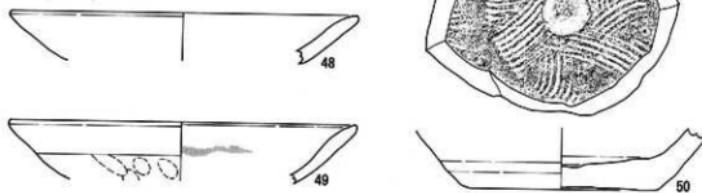
6 トレンチ(37~45)



クトレナサ(46~47)



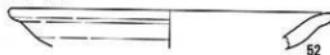
8 トレンチ(48~50)



9 トレンチ(51)



10 トレンチ(52)



0 5 10 cm

第9図 出土遺物実測図③ (S=1/2)

遺物 3層より16世紀前半の土師器皿が出土した。

10T（第6図）

層位 4層の堆積で一部削平が見られた。その下層である5層は、ロームを含む黄褐色粘質土で地山ブロックや塊を多量に含んでいる。

遺構 表上より約40cm程で風倒木痕と土坑（SK）を検出した。覆上から遺物は出土していない。土坑は3層形成以前に、4層を掘り込んでいることが断面図からわかるために、近世初期の所属時期が推定できる。トレンチにはローム層が確認できる他に炭化物片を含んだ褐灰色土が一部見られる。

遺物 3層から土師器皿と越前焼の壺片が、4層の土坑付近より上師器皿がそれぞれ出土した。

IV. 調査のまとめ

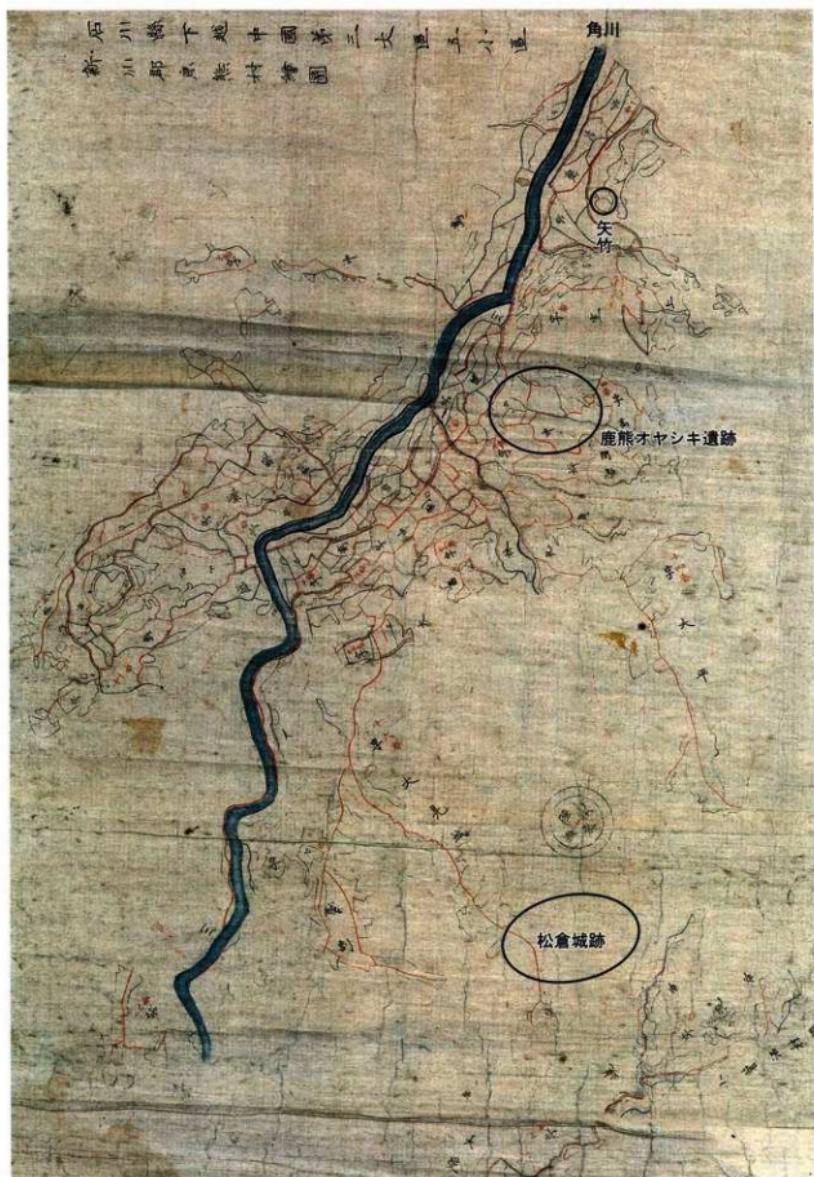
今回の調査では、城壁群を構成する山城の1つである升方城跡の地形測量調査と、鹿熊地内に所在する、通称矢竹と呼ばれる地点の試掘調査を実施した。鹿熊地内ではこれまでの調査においても遺跡として認知されていない箇所を確認してきたが、今年度も新発見の遺跡を確認できたことは大きな成果といえよう。調査では、建物跡などの明確な遺構は確認できなかった。しかし現在の耕作土下には、中世から近世にいたる遺物包含層が遺存していることが判明した。特に中世の遺物包含層には多量の炭化物が混ざっていることは注意を要する点である。また調査区の外縁部は自然地形ではなく、平坦面を造成していたことも確認できた。

出土した遺物のうち土器・陶磁器の種類は、破片数で上師器皿が101点（うち煤の着いた灯明皿が4点）、珠洲焼（壺・甕）3点、越前焼（壺・甕）7点、瀬戸美濃焼（碗）1点、瓦器鉢1点、青花楓1点、越中瀬戸（皿、壺・鉢）6点の計120点である。他に炭化材などの炭化物片がある。出土遺物の組成に関しては、土師器皿が全遺物の約85%を占める。これまでの鹿熊地区の調査では土師器皿の組成比は9割を占める事例が大半であるが、本遺跡も似た傾向を示しているといえよう。また、出土した遺物の所産時期から、当遺跡が15世紀後半から17世紀初頭までの存続期間が考えられる。土師器皿のうち、15世紀後半から16世紀初頭に位置付けられるものと、16世紀前半のものはほぼ同量で、16世紀後半にあたるものは約半分に減るもの定量存在している。土器の年代観と出土層位からは、上地の造成が15世紀後半の椎名氏の段階から行われていたことが推察される。また、調査区全体で認められる4層（灰褐色粘質土層）に、多量の炭化物と共に15世紀後半から16世紀代までの遺物が含まれることは、焼き討ちなどを行った後に人規模な造成・整地を行っていた可能性が考えられる。その時期としては、16世紀後半が妥当であろう。記録には永禄12（1569）年や天正8（1580）年に越後上杉氏や神保氏によって城下が焼き討ちにあったことが記されている。焼き討ちの規模がどの程度であったかは不明であるが、松倉城下へ至る入口付近である当地が焼き払われた可能性は十分考えられる。4層からは16世紀末の越中瀬戸が出土することから、人規模な整地が前田氏の段階に依ると判断される。しかし、16世紀末頃には魚津城が政局の中心となっていくこともあり、椎名氏を驅逐した上杉氏による整地・造成とも推測できるのである。現段階では、この遺跡の形成には、椎名氏→上杉氏→前田氏に依る3段階の造成・整地が行われたものと考える。

遺跡の性格としては不明な部分が大きいが、出土遺物の組成では、生活遺物の少なさや上師器皿の多さ（灯明皿も含めて）を挙げることができる点、遺跡の立地状況を考慮すると口的な場所ではなく、城下町内へ入る監視の役割を担った見張り台の機能を持った施設の存在が推測される。

回版	番号	出土地点	種類・器種	口径	底径	器高	口径 底径 残存率 (%)		色調	層位	備考
							残存率 (%)	残存率 (%)			
第7回	1	1T	土師器皿				にぶい黄桜	5	16世紀後半 非口クロ成形		
	2		"				淡黄桜	5	16世紀前半 非口クロ成形		
	3		"	12.0		8.5	にぶい黄桜	4~5	16世紀後半 非口クロ成形		
	4		"	8.0		15.0	淡黄桜	5	16世紀前半 非口クロ成形		
	5		"	11.0		5.0	にぶい桜	5	16世紀後半 非口クロ成形		
	6	2T	"				にぶい黄桜	4	16世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着		
	7		"	9.0		8.5	淡黄桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形か? 外面指頭痕跡あり		
	8		"	11.0		15.0	にぶい桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 全体的に黒色化 滅化物円形容器より出土		
	9		"	13.5	7.0	2.2	90.0	100.0	にぶい桜	6	15世紀末~16世紀初頭 ロクロ成形 焼付着 底部へラブリ
	10		"	9.0		10.0	にぶい黄桜	6	16世紀前半 非口クロ成形		
第8回	11		"	13.0		5.0	淡黄桜	3	16世紀前半 非口クロ成形		
	12		"	10.0		10.0	桜	3	16世紀前半 非口クロ成形		
	13		"	11.0		8.5	淡黄	底土	16世紀前半 非口クロ成形		
	14		越中瀬戸皿	11.0		12.5	赤桜	2	17~18世紀		
	15		越中瀬戸皿	15.0		8.5	暗褐	3	時期不明 異例なし		
	16	3T	土師器皿	11.0		8.5	にぶい桜	7	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形		
	17		"	10.0		12.5	にぶい桜	4~7	16世紀前半 非口クロ成形		
	18		"	8.8	4.0	1.8	90.0	100.0	浅黄桜	7	16世紀中頃 非口クロ成形 焼付着
	19		"	10.4		5.0	にぶい黄桜	底土	16世紀中頃 非口クロ成形		
	20		越中瀬戸皿	6.0		8.5	黒褐	3	16世紀末~17世紀初頭		
第9回	21	珠洲壺					灰	4			
	22	珠洲壺					灰	7			
	23	4T	土師器皿	9.0		8.5	にぶい黄桜		16世紀前半 非口クロ成形 外面指頭痕跡あり 溝状遺構より出土		
	24		"	11.0		8.5	淡黄桜	3	16世紀前半 非口クロ成形 焼付着		
	25		越中瀬戸皿	12.0		8.5	黒	4	16世紀末		
	26		青花碗				明緑灰	底土	15世紀後半~16世紀		
	27	5T	土師器皿	10.0		8.5	にぶい桜	3~4	15世紀後半~16世紀前半 非口クロ成形		
	28		"	15.0		8.5	淡黄桜	4	15世紀後半~16世紀成形か?		
	29		"	12.2		8.5	淡黄桜	3~4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着		
	30		"	14.0		5.0	にぶい桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着		
	31		"	12.0		15.0	灰黄褐	5	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着痕跡あり		
第10回	32	6T	"	13.0		8.5	にぶい桜	5	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形		
	33		"	11.0		25.0	褐灰	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 全体的に黒色化 焼付着 内外面に指頭痕跡あり		
	34		"	9.4	3.4	1.8	25.0	25.0	16世紀前半 非口クロ成形 全体的に黒色化 外側指頭痕跡あり		
	35		"	9.4		25.0	淡黄桜	3	16世紀後半~16世紀成形 外面指頭痕跡あり 16世紀中頃 非口クロ成形 外面指頭痕跡・ 内面に止め痕あり		
	36		"	9.2	3.5	2.2	100.0	100.0	にぶい黄桜	5	16世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 外面指頭痕跡・ 内面に止め痕あり
	37	7T	"				にぶい黄桜	2~3	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着		
	38		"				桜	3	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 焼付着		
	39		"	11.0		5.0	淡黄桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形		
	40		"	12.0		8.5	にぶい黄桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形		
	41		"	13.0		8.5	にぶい黄桜	4	15世紀後半~16世紀初頭 非口クロ成形 SK1出土		
第11回	42	8T	"	11.2		8.5	にぶい桜	4	16世紀前半 非口クロ成形 外面指頭痕跡あり SK1出土		
	43		"	9.2		8.5	褐灰	4	16世紀前半 非口クロ成形 全体が黒色化 土ガキ無し SK1出土		
	44		瓦器鉢	19.2		8.5	褐灰		15世紀後半~16世紀初頭 全体が黒色化 土ガキ無し SK1出土		
	45		瀬戸美濃平継	15.0		8.5	黒褐	10	15世紀末		
	46		土師器皿				にぶい桜		地山面上 16世紀前半 非口クロ成形		
	47		"	8.0		8.5	にぶい桜		地山面上 16世紀中頃 非口クロ成形		
	48		"	14.0		5.0	灰白	4	16世紀前半 非口クロ成形		
	49		"	14.0		33.3	桜	4	16世紀前半 非口クロ成形 焼付着 外面 指頭痕跡あり		
	50		越中瀬戸焼鉢		7.8		100.0	100.0	桜	4	16世紀末~17世紀初頭
	51	9T	土師器皿	10.4		8.5	にぶい黄桜	3	16世紀前半 非口クロ成形		
	52	10T	"	13.0		13.0	桜	底土	15世紀後半 非口クロ成形		

表1 出土遺物観測表



鹿熊地区 地籍図（1）明治9年 縮尺約1066分の1



鹿熊地区 地籍図（2）明治9年 縦尺約1333分の1



矢竹遺跡遠景 (1)



矢竹遺跡遠景 (2)



調査前風景 (1)



調査前風景 (2)



調査前風景 (3)



調査前風景 (4)



調査より下方向の風景



発掘調査の風景



1トレンチ断面



炭化物面検出状況(2トレンチ)



石器群検出状況
(3トレンチ)



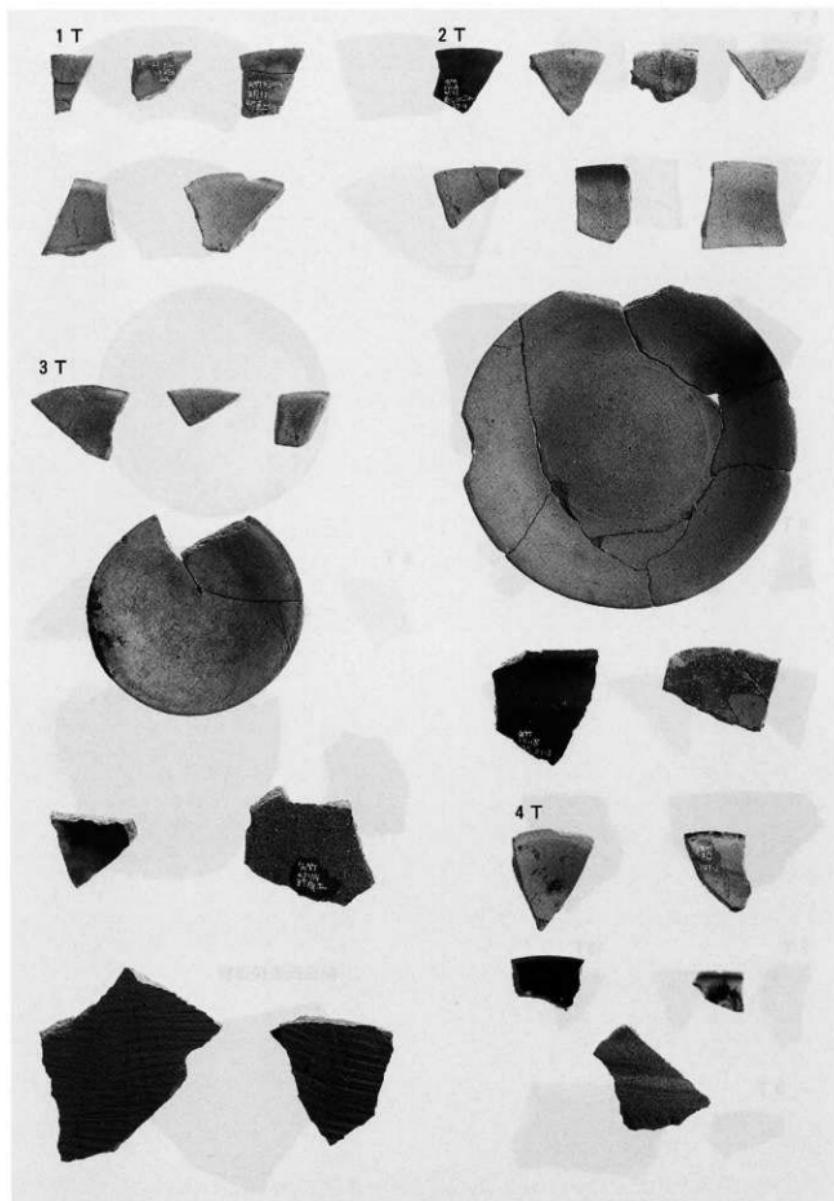
土師器皿出土状況(2トレンチ)

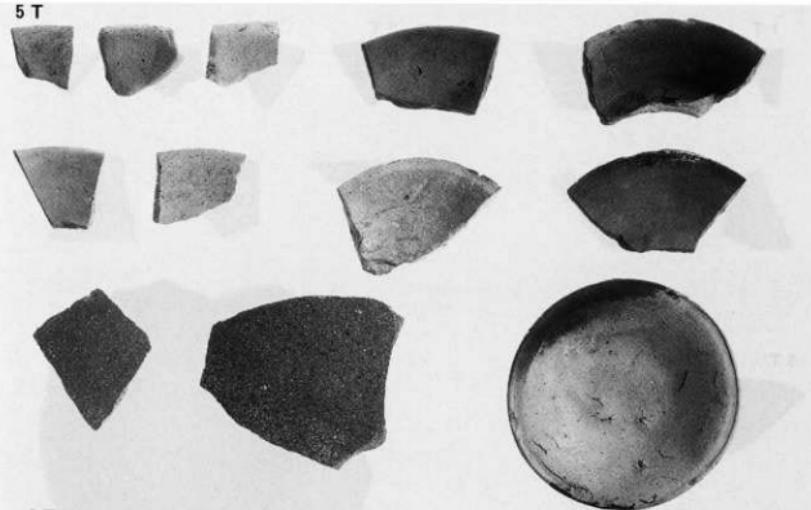


6トレンチ断面



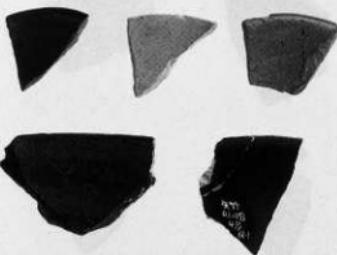
出土した炭化米と炭化材

出土遺物（1）1～4 トレンチ ($S=1/2$)



6 T

8 T



7 T

10 T



9 T



杉田氏表探遺物



出土遺物（2）5～10トレンチ（S=1/2）

報告書抄録

ふりがな	まつくらじょうるいぐんほくつちょうさほうごく
書名	松倉城塁群発掘調査報告Ⅲ
シリーズ名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
編集者名	塙田明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937-0066 富山県魚津市北鬼江313-2 TEL 0765-23-1045
発行年月日	西暦2004年3月31日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
鹿熊矢竹 遺跡	富山県魚津市 鹿熊	市町村 16204	遺跡番号 36度 45分 50秒	137度 25分 50秒	2003.11.12～ 2003.12.11	50	市内遺跡発 掘調査事業

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿熊矢竹遺跡	城館関連	中世	土坑 溝状遺構	土師器皿、珠洲、越前、青花、炭化物、越中瀬戸	戦国期の造成・整地層を確認

富山県魚津市 松倉城塁群発掘調査報告Ⅲ

発行日 平成16年3月31日発行

編集・発行 魚津市教育委員会
富山県魚津市北鬼江313-2
TEL (0765)23-1045

印刷 共栄印刷株式会社

